

## 金魚は「金魚」



## What's in a name?

にしやま ふみえ 西山 文愛 総合研究大学院大学博士課程

動物園などに足を運んでみると、ゾウの「花子」や、ライオンの「キャンディー」、アシカの「ララ」といった個別の愛称が付いた動物に会うことができる。一方で、紹介キャプションに、愛称のある動物とない動物もいる。

例えば、群れで飼育している動物に個別の名前は揭示されていない。実際、三〇羽のコザクラインコの名前を掲示することになったら、来場者も飼育員も手上げであろう。しかし、その群れのなかに特徴的な個体があらわれると、個別の名前が付いてメディアなどで、もてはやされる場合もある。

わたしは学部生時代に金魚の飼育に熱中していた時期があった。当初は、小さな水槽で三匹の金魚を飼育していた。わたしは水槽を天気図に見立て、三匹に「タイフウ」「ヘクトパスカル」「トラフ」と名前を付け、餌をあげるときや、視界に入ったとき、生活のなかで頻繁に彼らの名前を呼んで愛でていた。

ある日知人から、一〇匹の和金を譲り受ける機会があった。数が増えることに戸惑いを覚えたが、タイミングよく大きな水槽も手に入ったので飼育することにした。しかし、今までは、金魚一匹一匹に名前を付けていたのに、一〇匹の和金の愛称はただの「金魚」のままだった。大事なペットに変わりはないが、数が増えたことで、個々の金魚に対する特別な愛情が希薄になったことに、戸惑いを覚えた。

一九七〇年代以降、欧米を発端にコンパニオン・アニマル(伴侶動物)ということばが使われるようになって

た。伴侶動物とは、家族や恋人、友人のように人間に寄り添う動物たちのことである。従来は犬や猫が中心であったが、近年、先進国の都市部では、小鳥やハムスターといった小型の動物にも、家族や友人のように接する社会現象が起きている。

わたしも、水にゆらゆらと泳ぐ三匹の金魚たちを、いささか一方的に友人や家族のようにみなしていた。しかし、「個」が「集団」になると、金魚は友人でも家族でもなく、鑑賞するための「金魚」になっていたのだ。

昨年、調査地であるマレーシア・ボルネオで、お世話になった焼畑農耕民クランビットの家族から、現地語の名前を頂く機会があった。おとうさんが「今日から家族の一員として、おばあちゃんの若いころの名前をあなたに授ける」と言うと、家族一同がわたしの元に集まり、代わる代わる手を握りながら新しい名前を呼んでくれた。その瞬間、体温がポツと上昇し、家族の顔や家の構造、生活道具などの視界に見えていたものが鮮明に映る感覚になった。

わたしは名付けによって「日本人」||「集団」から、「家族」||「個」として見てもらえるようになったのである。わたし自身も、彼らとの距離が縮まった気持ちになった。名付けは、物語のキャスティングのようだ。例えば、金魚の「タイフウ」は、生活という物語のなかで主要キャストである。一方、名がない「金魚」たちは物語を彩るエキストラである。わたし自身、名をもらった瞬間にスポットライトを浴び、その土地で物語がはじまった気持ちになったのである。